

照明寺

日本海を見下ろすこの寺は、詩人や書家としての才能で名高い風変わりな僧、良寛（1758-1831）のゆかりの地としてよく知られています。寺宝には、真言宗の開祖である空海（774-835）作とされる像や、龍や季節の花を描いた天井画などがあります。6月16日～17日にこの寺で開催される観音講（英訳: Kannon Sermons）は、地域住民が食事、祝賀、お参りのために集まり、200年以上も続いています。

歴史

照明寺の起源は、和歌山県の高野山に安置されていた慈悲の菩薩、聖観世音菩薩の小さな像からはじまります。その像は804年に空海が自ら鑄造したと伝えられています。

1049年、僧侶の栄秀は夢に導かれて観音像を持って仏法を広めるために全国を巡りました。伝説によると、寺泊に着くとその像は突然重くなり、栄秀はまた夢で見た観音の教えに従い、そこに庵を建てたといいます。

長年にわたり、源義経（1159-1189）や上杉謙信（1530-1578）などの有名な武将が、戦勝を祈願するために照明寺を訪れたと伝えられています。1695年には、五代目徳川将軍の親戚の女性が照明寺で祈祷した結果、目の病気が奇跡的に治り、徳川幕府は感謝の意を表して新しい観音堂の建立を支援しました。

最盛期には照明寺の境内に 6 つの塔頭寺院がありましたが、1758 年や 1841 年の火災で消失し、密蔵院のみが再建されました。

観音堂

本堂には、真言宗の開祖・空海が 1000 年以上前に鑄造したとされる聖観音像をご本尊として安置しています。聖観音像は 50 年に一度しか公開されないため、通常はより現代的な聖観音像が展示されています。

格天井には龍の墨絵が中心に飾られ、その周囲には四角い窪みに 200 枚を超える絵画が描かれています。絵画のほとんどは季節の花ですが、仏神、龍、御詠歌、法輪なども描かれています。内陣入口の両側には風神と雷神、右側には羅漢である賓頭盧の像があります。信者は通常、彼らの痛みや病気がある賓頭盧像の箇所をさすりますが、照明寺では願い事を考えて像全体をそっと持ち上げる習慣があります。重く感じたら願いが叶うといわれています。

このお堂は火災後、1930 年に再建されました。外側の木彫には鳳凰、獅子、龍などの生き物が描かれています。

密蔵院

詩僧の良寛（1758-1831）は正式に一つのお寺の僧侶にはならず、友人や施しに頼りながら放浪の日々を送りました。良寛の妹は寺泊に住んでいた関係で、良寛は 45 歳、70 歳、

72歳の3回、照明寺の密蔵院に住みました。

良寛が寺の過去帳に残した和歌「ひめもす」は、僧侶としての活動を綴ったものです。

「終日に 夜もすがらなす 法の道 うき世の民に 回して向かはむ」

良寛が寺泊を去る前に詠んだ和歌「縁あらば」は、仮住まいへの思いを綴ったものです。

「縁あれば 又も 住みなむ 大殿の 森の下庵 いたく あらすな」

元々良寛が住んだ塔頭は1841年火災で消失しましたが、1958年にある茶道の流派の協力により密蔵院は茶室風の庵として再建されました。庵内には良寛が滞在時に信仰していたとされる無限の光と命を持つ仏、阿弥陀如来と二つの随行菩薩の像があります。外には老年の良寛の像が、柔らかな笑顔で托鉢鉢を手に立っています。

境内

寺の階段の左側には、子どもの健康を祈る小さな子育て地蔵のお堂があります。右側には不動明王像があります。信者は、その横にある柄杓と手水鉢で不動明王に水を3回かけ、癒し

てほしいところを触ります。境内には、良寛が滞在中に書いた和歌を刻んだ5つの碑が点在しています。10月と11月には、ツツブキが鮮やかな黄色の花を咲かせ、風景に彩りを添えます。